翻刻

3369

明治七年八月改正

小學讀本卷之貳

師範學校編輯
文部省刊行

東京第四大區小六區
石川大爪町三十番地
橋藏貫一地
青山清吉
小三版
兌發

特
4

小學讀本卷二釋文

第一

女兒 鞦韆 牝雞 鶩 水上 泳 爾 悲 量 隨意 游水鳥 成長 蹼 許 多 釣 曇 雨天 雨降 暖 途中 柔 和 手綱 此處 工人 作事場 大人 戲 高低 斧 鋸 時間 妨

第二

住居 一廻 旋 輝 一同 草苅場 枯草 牛馬 田畠 遊行 蝸牛 甸 蟲 驢 馬 漑 遽 深 水 怠惰 時刺 磬 古 等級 屢

第三

雁 導 飛行 水邊 植物 枯 朽 呼吸 鳥獸 空中 身 體 跪 豆 種子 膨脹 破裂 葦 灌木 喬木 幹 葉 高大 茶褐色 斑 田野 席 踰 隣家 盜 咬 行狀 穀倉 帯 飲水 水鉢 傾 斜 表 面 一滴 咽 撑子 横木 撞 捜 幾度 終日 先刺 復讀

第四

去年 外國 出立 殆 両親 何許 恙 堅固 破損 船中 貿易 林中 林禽 水禽 啄木鳥 樹皮 風情 呼吸 近隣 喞 筒 頻 牧場 貧賤 雲雀 麦畑 親鳥 畠主 農夫 翌日 最早 須臾 猶豫

第五

花園 種子 蒔 蔓 雑草 成長 抜 害 崩出 培養 教師 不正 良心 妥 圓 四角 形 交 見聞 内外 互 問答 樂

特26
466

小學讀本卷之二

田中義廉　編輯
那珂通高　訂正

定價十五錢

第一

此女兒ハ、人形を持てり○汝も、人形を好むり○我も甚こきを好めり○此男兒も、人形を持てりや○否、男兒ハ、人形を持さゞりて、

鞭を持てり、男兒の遊へ、女兒と異ふきべなり」

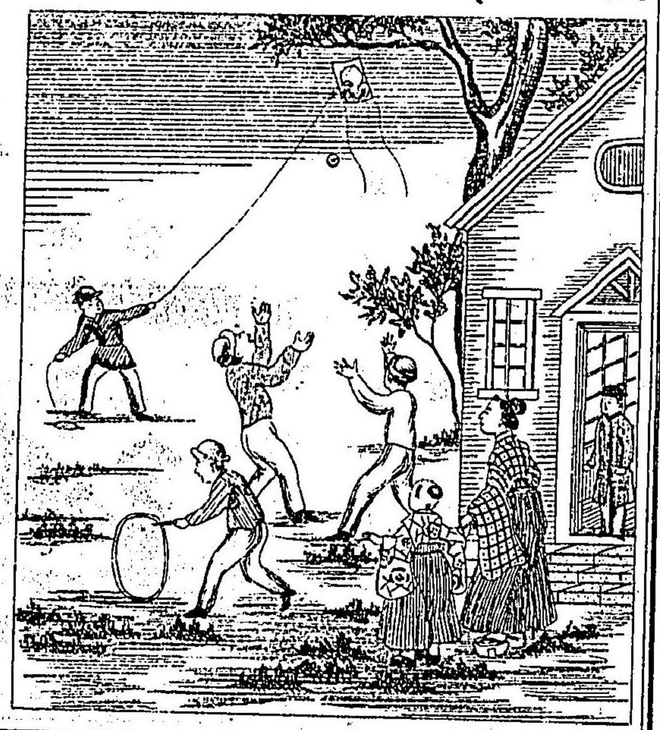
老たる牝雞、鶩の子を、多し伴へり○此鶩の子へ、皆水の中ゑ、飛入きり○此鳥へ其性、水上ゑ泳ぐことを、好めり○牝雞へ、其沈み溺きんことを、恐きて、甚憂ひ悲めり○然きど雞へ、此鶩の、游水鳥ふるを、知らも、鶩の子へ、牝雞の心を、量り知らばして、隨意ゑ游べり○牝雞へ何を憂ひ悲むと、思ふや○牝

ばして、我子と思ひ、悲めるなり」

爰ゑ、成長したる鶩なり○鶩の嘴ゑ、牝雞の嘴より、大ゑして、其足ゑ、蹼なり、故ゑ、水ゑ入りて、能く泳ぐことを、得るふるなり」

此へ、何家ふるを知きりや○これも、學校ふるべし、數多の男女の子、此家ゑ通ふを以て、知らきたり○汝へ、小兒の遊歩場ゑ、出でゝ遊ぶを、見たりや○數多の小兒、出でゝ走るもなり、球を弄ぶもなり、或へ、紙鳶を揚げ、或へ輪を廻もして、遊べり

○男兒も、女兒も、學校にてハ、能く勉強せべし○能く勉強したる、後は非きべ、遊歩をもするとも、誠は、樂きことハ、あきものふり今此子の、釣りたる魚ハ、鯉あり○汝も、魚を釣り得たるときハ、能く心を用およ、釣糸を切らることゝ、なるべし○天曇りて、雨少しく、降り來



るハ、宜しからべ」男兒と、女兒とあり○魚を釣るまハ、雨天のときを、宜しとをるう○然り、少しく雨降りて、風あく、暖あるを、宜しとに○汝ハ、魚を釣るを以て、宜しき事と思ふり○然り、魚を釣りて、食をるハ、惡しき事は、ならべと雖、釣りたる魚を、弄ひて、徒は捨つ

○これハ、學校へ行く、途中あ

り○今急ぎて學校ニ行らんと、思ふゆゑニ、男兒ハ、女兒を助けて、走きり○此兒等ハ、學校ニ行くを、樂と思へりやの○然り、此兒等ハ、其性善きものゝ、のゝきべ學校ニ行きて、學問することを、第一の樂と思ふなり」

此馬ハ、柔和なる馬ゆゑ、二人の小兒を、乘せて歩めり○此馬を、走ると、思ふゝ○此馬の、前の一足を、擧げて、あとの一足を、下さんとするを、見きハ、

走るニハいちじ、徐ニ歩むゝり○前の小兒ハ、手綱を、両手ニ持ちたれども、其見ゆるハ、只右の手のみゝり○後の小兒ハ、馬より、落つることを、恐るゝゆゑニ、前の小兒を、抱きてをれり」

此處ハ、工人の作事場ゝを事とせり○二人の小兒ハ、此作事場ニ來り、板

は乘りて、遊び戯き居きり、一人の小兒は、高く上ずり、一人は、低く下がりたり○汝は小兒の傍なる、器を、何ぞやと思ふや○こたへ、斧と、鋸なり○汝は、此小兒等を、善き小兒と思ふか○作事場に、來りて遊ぶべ、善き小兒なれば、ならざるべし○今は、遊歩をべき、時間と

は見えば、學問をべき、時間なり、作事場は、來りて、遊び戯を、作事の妨をする、必ならしき小兒なり○汝等は、遊歩のときも、作事場は、來るべからず、遊歩場にて遊ぶべし」

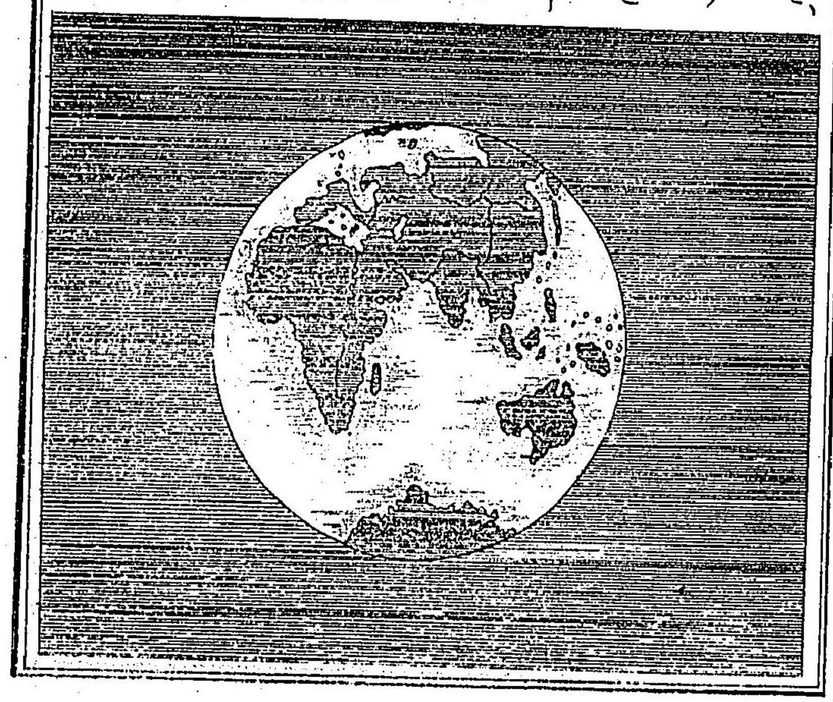
第二

我等の住居をる世界は、平なるものにあらず、實は圓くして、球の如きものなり、故に世界を、地球といふ、○此世界は、靜かなるやうに、覺ゆれども、實は、動くものにて、毎日一回づゝ、旋りて一年には、太陽の周りを、一旋りをるものなり○太陽は、圓

きものゝて、世界ゝ光と、熱とを與ふるものゝあり

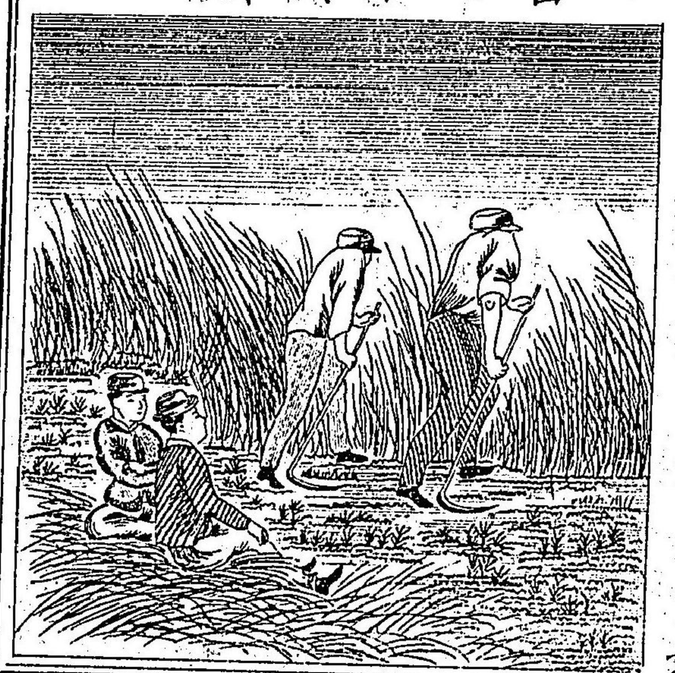
○我等、晝ハ、太陽を見きども、夜ハ、見ることゝあしき

○汝、夜の、太陽を見ることを得ざるハ、何ゆゑなることを知きりや○夜ハ、太陽の方ゝ、向もざるゆゑなふに、見ることを得ざるふり○月も、亦圓きものゝあふ



きども、太陽、及、地球の如くゝ、大あらぬ○月ハ、原より、光あきものあきども、太陽の光を、受けて、始めて輝くものあり」

我等一同ゝ、草刈場ゝ出來きり○小兒ハ、刈りたる草の上ゝ、坐し居て、草ハ、を刈るを觀る○枯草柔ふる物あきハ、此上ハ、遊ひ戯るゝゝ、宜しきあり○草ハ、牛馬の食ふ



ゆゑに、牛馬を畜ふ家にては、夏の間に、刈りて、こきを貯ふ」

狐は、犬に似たる獸にして、頭平に、鼻と耳とは、尖りて、尾は甚長し。此獸は、穴の中に住し、晝は隱れて、出でず、夜に入れば、穴より出でて、田畠の傍を、遊行す。狐は、食を貪る獸にして、多く雞の雛を食ひ、又好きて、桑

の實、櫻の實等を食ふ。雞を捕ふるには、穴に持ち行きて、こきを食ふ。もし、犬を見るときは、穴の中に、逃げ入りて、出づることなし、是は、穴に入らざれば、直に犬に噛み殺さるゝ故なり」

蝸牛といふ蟲は、足なきゆゑに、歩むこと能はず、只匍匐するのみなり」

この蟲は、背の上に、殼ありて、物に恐るゝときは、其中に縮み入る。蝸牛の、動くときは、四本の角を出さず、其中、二本の長き角

の先は、目ありり、短き角の下は、口ありり○此蟲は、冬は、土の中は伏し、春の至るを待ちて、出つるなり」

汝と、此處は、男兒と、女兒と、驢馬の在るを、見たりや○男兒は、驢馬は乘らんとに○何如は、汝を乘り易かるべしと思ふ○驢馬は、小さき馬なれども、小兒は、乘り難るべし○遥の向ひは、荷車なり○汝は、此荷車を

何ありと思ふや○遠き處ゆゑ慥は見分くること、能もぎれども、畠の小路は、なるを見まべ、穀物を載せたる、車ありるべし」

此圖は、画きたるものは、何ありや○大人と、小兒と、二人水中は立てり○此等は、何をあにや○此人々は、魚を漁をるなり、大人の釣りたる魚は、大ゆるゆゑは、強く曳うべ、糸の切れんことを、恐れて、遠は、曳き擧げぎるなり○男兒の、持ちたるものは、何ありと思ふや○そは、網の類にて、たまといふものあり○男兒は、此網を以て、魚を捕へ

んとに。大人の脇ゝ、懸けたるハ、何ぞ。こゝをハ、蓋のなる籠ゝて、其中ゝ、魚を入るゝ。此人の立ちたる處ハ、深ゝ。ゝと思ふ。人の、膝まで、水ゝ入らざるを、見まを、甚深からば、もし、深水ふまば、二人とも、立つと、能はざるべし。此河

ゝ、架したる橋なり。汝ハ、此橋ハ、何ゝて造りたると思ふぞ。橋ゝハ、木と、石と、鐵との別ハなきども、こゝをハ、木にて造りたる橋なり、汝ハ、此男兒を、何歲許ありと、思ふや。此男兒ハ、十歲以上ゝ。此男兒ハ、善き人ゝ。と、思ふ。否、學問をもせに、又遊歩をもふさばして、休みをるゆゑに、怠りものと、

知らるゝあり○此男兒へ、何は倚りて、何を見るや、○此男兒の、倚りたるものへ、大なる石の柱なり、又此男兒へ、何をも見ず、只天をあがむるあり」○總て小兒は、勉むべき時むかり、遊ぶべき時もかり○此小兒の如し、常は勉强をなさゞるときへ、成長の後、人に勝ることを得ざるあり」

爰は又、怠惰の小兒なり○彼へ、學校へ行くと云ひしが、何ゆゑは、學校へ、行うばりて、途中に遊び居るや○未學校へ行くべき時刻、來らばや○學校にてへ、既に稽古始まりたまへば、此小兒もと

く行くべき時刻あり○然らば、何ゆゑ、爰に止まり居るや○彼へ、犬に乘り、又他の怠りものと、遊んと、思へばあり○彼へ、學校に行くのから、其書をば、何處に置きたるや○書をば、自分の家に、怠きたるあり○されば、學校に行きたりとも、稽古をすることを得ば○善き小兒へ、書を、大切にあして、學校に行

しを好み、誓古の時間來たべ、決して、途中にて、遊び居ることなし、學校にても、能く勉強して、學ぶゆゑに、其等級、屢進むあり」

第三

雁の、列をなして、行く圖

なり。○見るべし、一羽の雁、導をなせば、其他の雁は、これに隨ひて、飛行く、やを○是も、何處に行くや、

○或は、水邊に行きて、葦

の間に息み、或は、田に下りて、食物を求めんとにるあり、

此鳥は、冬は北より南に來り、春に至れば、又南より北に歸る、故に夏は此地に居ることなし」

地に生ひ出づる物に、草と、木とありて、木に、灌木と、喬木とあり。○草は、其幹葉一年限りにて、枯るゝものあり、灌木は、高一丈に出でゞと雖、其幹は、枯きざるもの

ふり○喬木とハ、成長して、高大ニ至るものを云ふ○此三の者を合せて、植物と云ふ、植物ハ、生を保ちて、能く成長し、又死してハ、枯朽るものなり、ども、人の如くハ、物を思もぴ、根ハ、食物を、地下より吸ひ、葉ハ、能く呼吸もれども、鳥獸の如く、動こと「ふ」

ハ、二つの足と、二つの翼ハ鳥ハ、多くハ、空中ニ翔る、又水上ハ住むものもハり○獸類ハ、四足ニして、膚ニ、長き毛ハり○此鳥と獸とハ、身體を、意ニ從ひて、動かせども、人の如く、言ふことと能ハぬ」

汝ハ、實のる草木の、種類を知るべしや○其莢を見て、豌豆と、蠶豆とを知り、穗の形を見て、稻と、麥とを知るべし

草木ニハ、皆種子ハり、豌豆、蠶豆ハ、莢の中ニ在りて、梨、李、橙ハ、肉の中ニ在り○種子の、食物とおるものハ、稻、麥、豆、黍、粟の類なり、肉の、食

物とかるものハ、梅、桃、梨、李、蜜柑の類なり

草木ハ、皆種子より生ゝ、濕ひたる土の中ニ、種子を置くときハ、漸ニ膨脹して、遂ニ破裂し、其所より、芽と、根とを生ずるかり」

鹿ハ、山林ニ、住そる獸なり、

この獸の牡ニハ、枝を生ずたる角ありて、牝ニハ、角なし、

其色ハ、茶褐色にして、白き斑あり

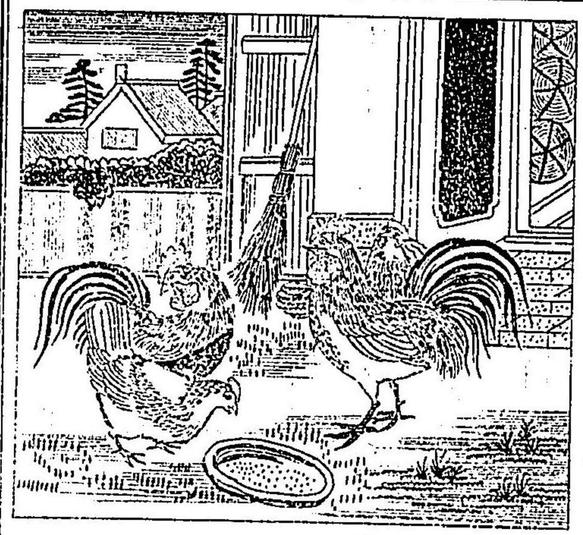
鹿ハ、長き足ありて、走ること

と、甚速かり。常ニ、草木の葉を、食とし、或ハ、田野に来りて、穀物を、食そることかり、此獸の角ハ、堅くして、器に造るべく、又其皮ハ、席とかゝべし」

此男兒ハ、惡しき心のものかり、汝ハ、この男兒の持てる、帽の中に、ありる物を、見たるか。これハ、柿の實かり。此柿の實ハ、垣を踰えて、隣家より、盜み取るかり。今此男兒、柿の實を盜み取り、垣を踰えて、出でんとする所を、數多の犬ども、これを見て、男兒を追ひうけ、一匹の犬、男兒の裾を咬へさりよりて、男兒ハ、垣を踰え去ることを得ゝ、

此時、盗みたる枠の實を、捨ておべ、犬へ、裾を放つべけきども、此男兒へ、これを捨つること能もば⊙他人の物を盗むへ、決して、為まじきことなり、善き小兒へ、自分の物ゑ、ひらざれむ、取ることなし⊙常ゑ、行狀の、正し、きものへ、幸多く、正しうらざるものへ、幸を得ること、能もざきべ、汝等他人のものを見て、何如あるものありとも、必これを、得んことを、欲もることあかまじ」

爰ゑ、四箇の雞と、穀倉とひり⊙汝ず見る所ゑて へ、これのみありや、⊙否、家の後ゑ、松ひり、垣ゑ、寄せて、立てたる幕ひり、雞の飲水を、入れたる、水鉢ひり⊙汝へ、此鉢ゑ、水ひりと思ふや⊙必水ひるあるべし、⊙何を以て、水のひるを知れる⊙此鉢も、少し傾きて、一邊の縁、高く出でたるを以て、水のひるを知れり、水へ、傾きたる鉢の中ゑても、決して、斜ゐ



傾くことふく、其表面へ、必、一様ニ、平なるものなり。汝ハ雞の、水を飲むを、見しや、雞ハ、牛馬の如く首を下げて、飲むこと能もず、ゆゑニ一滴口ニ入きべ、首を擧げて、咽ニ、飲み下だすなり」

此處ハ、何如ふる所ぞ。ふりや。此處ハ、穀倉の傍なるべし、雞ハ、巣に、上らんとして、梯子を、傳ひ行くなり、

。梯子に、横木なり、こゝにハ何ぞや、此横木ハ、梯子の級なり。

汝ハ、雞の巣を、見たるか。巣ハ、隱きて、檐の裏ニなるゆゑ、見ることを得ず」

汝、此處ニ来き、汝、昨日、失ひたる所の、書籍を、尋ね得たりや。否、未ダ尋ね得ず。汝ハ、文庫の中を、搜し見たりや。幾度も、搜し見たれども、其處ニなければ。汝、今一度尋ね見よ、書籍ふけきべ、學ぶことを能もず」

又、汝ニ、筆なりや。筆ハ、命ぜられたる如く、文庫の上ニ、置きたり。汝ハ、筆の用ありたる、知きりや。否、未ダ用ゐかたを知らず。汝、今、其筆を取来

き、汝は、筆の用ゐ方を、教ふべし、筆の用ゐかたを、知らざれば、字を習ふこと能はず、

汝は、今日、學校は行きたりや

○學校は行き、終日學びて、先刻歸り來たり○然らば、座は就きて、復讀せよ、凡て、學びたる所をば、常は、復讀して、決して、忘るべからず」

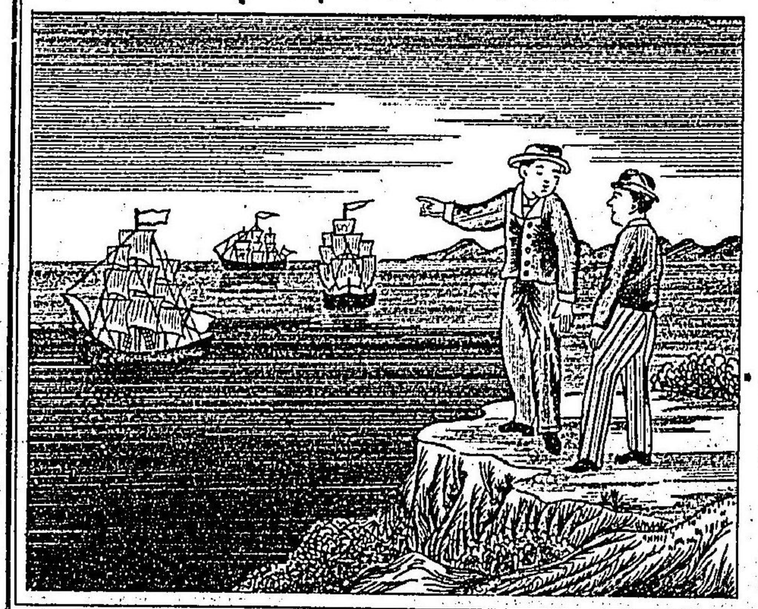
第四

岸の上は二人の少年ありて、三艘の船の、岸は着

くを、見居たり○三艘共は、帆を十分に張りて、擂の上は、旗を揚げたる、船なり

一人の少年云ふ、我が朋友は、去年、先の船に乘りて、外國に、往きたりしが、日を數ふれば、其出立せしより、今日まで、殆一年に及びて、歸り來たり

彼の両親も、日々、彼の歸る



を待てり。今日無事なる顔を、見ることを得て、何許りか、喜ばしからん、また彼男も、父母の恙なき顔を見べ、定めて、大に喜ぶべし」

彼船へ、堅固なる船にて、風雨に逢ふとも、破損なく、無難に、歸り來きべ、船中の人々へ、皆此船を、忝く思ふべし」

人々の、外國に行くへ、學問、或へ、貿易をなして、我國の、利益をなさんことを、欲するゲゆゑなり」

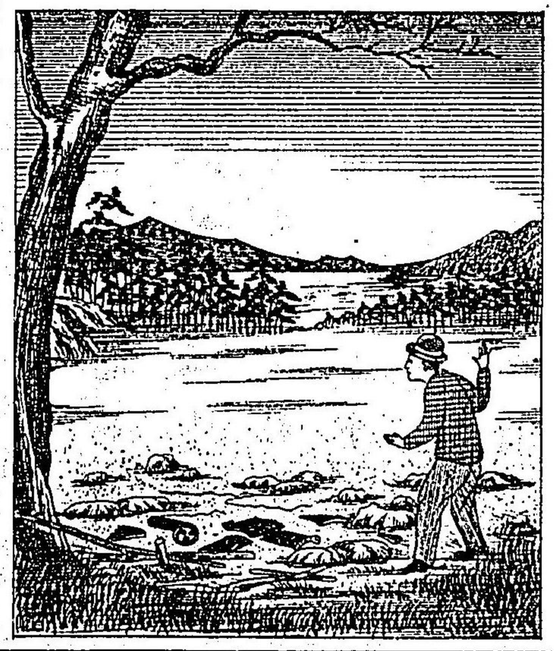
總て鳥も嘴の長きものと、短きものとあり。此嘴にて、食物を啄む。鳥には、穀物を、食するもの

と、魚、又へ、蟲を食するものとあり。鳥の目へ、面の両側にあるゆゑ、一時に、両方を見ることを、得るなり。林中に遊ぶ鳥を、林禽といひ、水上に遊ぶ鳥を、水禽といふ。鳥の足には、四指ありて、三指へ、前、一指へ、後にあり、然れども、啄木鳥類も、前後、各二指ありて、能く大木に上下し、樹皮の中に、住む蟲を、搜し食ふ」

此人ハ、驚きたる風情なり、是ハ何故ぞりや、○何故ぞることを知らば、○此人も、久しき以前は、遠方ゝ行きて、今、我郷ゝ、歸り来きるゝ、昔住みたりし家の、變りたるを、見て、驚けるぞり、

さて此家の、斯く變りたる所以を、話し聞うにべし、

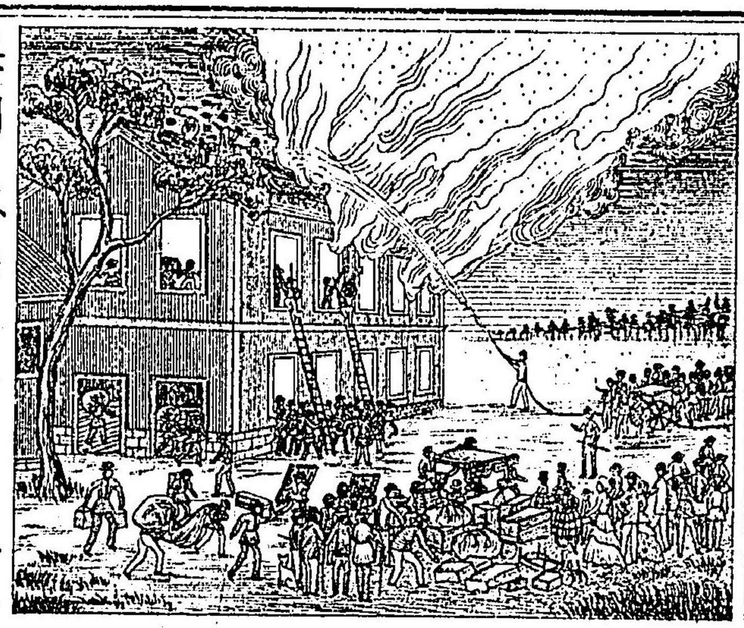
此人の、家を出でたる後、近隣ゝ、一人の小兒なり



しが、此小兒ハ、至りて惡しきものにて、ある日、戯ゝ、紙を焼きて、遊べるゝ、其火、忽家の障子ゝ燃えつき、終ゝ此家まで、焼け失せたり○さきべ、今此人、我家ゝ歸り来りても、未ダ妻子の行きたる所を、も、知ることと能もば、ゆゑゝ悲み歎くぞり、

今此人の家の、焼けたる時の狀を、圖して示さん

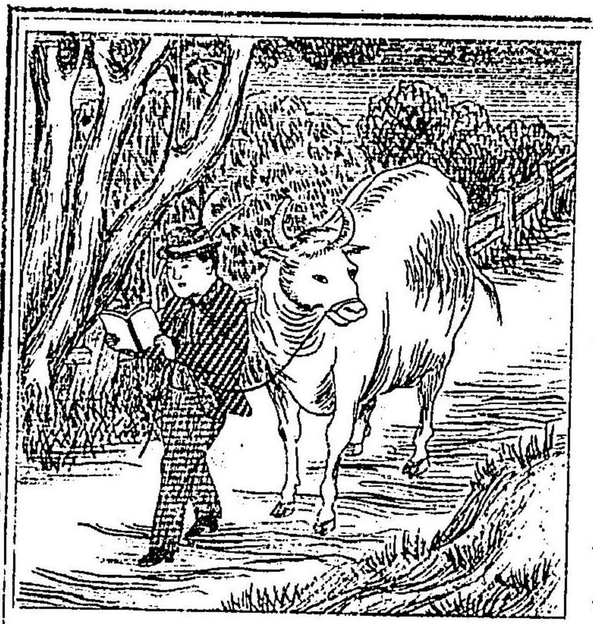
○火と、烟との、家の窓より、吹出づる所を見よ○又、家ゝ懸けたる、掛子なり○掛子ゝ上りて、火を消さんとする人なり○多くの人も、唧筒ゝて、頻ゝ、水を注げり、



此圖は、曳きたるき、柔和なる牛にして、此小兒は

然きども、火猶消えざりて、家終は、燒け落ちたるゆゑ、この家の人々も、皆逃げ去きたるなり

きべ、小兒は、火を弄ぶべうらば、一度過つ時は、家をも、倉をも失ひ、甚しきは至りては、其身をも、失ふこと、なるものなり」



隨ひ、徐は歩めり、此小兒は、今牧場は、牛を、曳き行く所なり、○此小兒は、何ゆゑは、歩みながら、書を讀むや、此小兒は、其性極めて賢く、常は、學問をることを好めども、家貧しきゆゑは、學校は入ることを能たはざりて、日々、牧場は行くなり、然きども、學問の志、深きは因りて、道を行く間も、書を讀むなり、又牧場は至りても、休む間は、書を見ざ

ることあり、○此の如き小兒は、他日、必人はまさりて、貴き人となるべし、

惡しき小兒は、日々、學校は行くと雖、能く勉强せずして、遊ぶことのみを、好むゆゑ、後は、愚なる者となりて、貧賤は、其身を終るべし、」

雲雀、巢を、麥畠の間は、造りて、雛を育てたり、○麥は、已は熟して、刈るべき時は至りたるは、雛は、未だ自由は、飛ぶことと能もず、一日、親鳥、食を求めんとて、飛び去り、暮は及びて、歸り來きは、雛告げて今日、此畠主なる農夫、其子と共は來りて、明日は、近

隣の人を雇ひて、此麥を、刈り取らんとて、歸きりと云ふ、親鳥聞きて、彼近隣の人を、雇をんとあらば、未だ急は、刈取るべうらば、明日は、此處は行りとも、恐るは足らじといひ、其翌日も、亦食を求めんとて、飛び去りたり

かくて、日の暮るに、此、親鳥歸り來きは、雛又告げて、今日も、農夫、其子と共は來りしが、近隣の人も同じ

く、己が作りたる、麥を刈るに、暇ならざれば、明日は、朋友、親族を頼みて、刈り取らんとて、歸りと云ふ、親鳥は、彼尚他人を頼むの、心ならば、明日も、憂ふるに足らじと、云へり

さて其翌日、親鳥例の如く、飛去りて、歸り來るに、雛の云ふ、今日は、農夫父子來りて、かく麥の熟せるうへは、最早、他人の力を、待つに暇ならば、明日は、自刈り取るべしとて、歸りと云へり

親鳥は、こを聞きて、然らば我等も、疾く此處を、立ち去るべし、農夫ら、自刈り取らんと、決したるうへは、必日を延むにべうらじと、いへりとぞ

親鳥の言、實に理なり、他人に依りて、事を成さんとする者は、恐るるに足らざれども、自為さんと決する時は、須臾も、猶豫せざるべけをべあり、さをば、人々、皆自為さんことを、志して、他人の力を、頼むべうらじ

第五

今、花園に、善き種子を、蒔きて、善き植物を、生ぜしめ、美しき花を、開うしめんとするに、園中に、蔓を、雜草を、拔き取らざるときは、蒔きたる種子を、

害して、生長すること、能はざらしむ

今、此處に、花園の、雜草を、拔き去る圖を、出だして

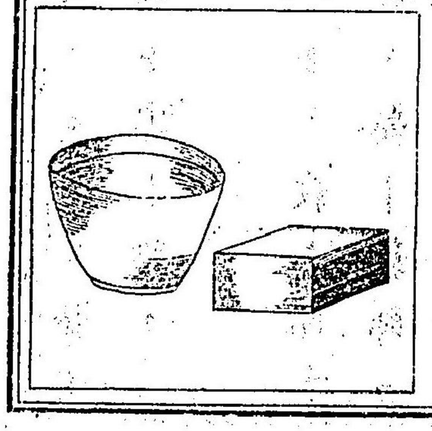
以て、これを示さん

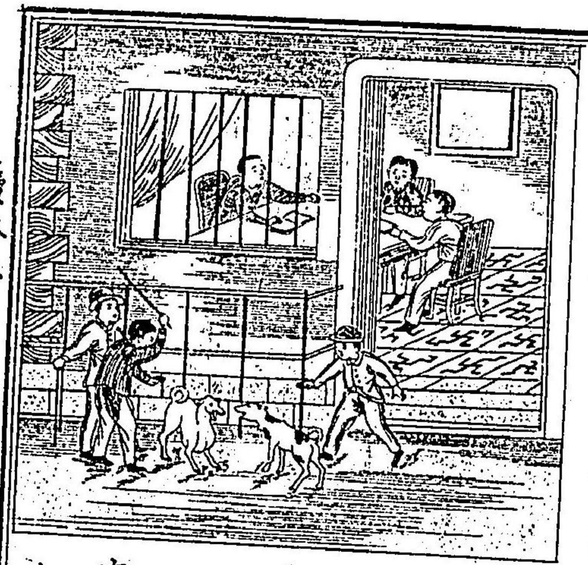
地へ、もとよきものあるをども、善き種子を、蒔うざれば、よき植物を生ず、美しき花を、開くこと能はず、又、芽既に萌出でたるときへ、能く培養せざるべ、生長にること能はず、雜草へ、こをば反

して、種子を蒔うざるども、自生長しこをを拔き去らざるべ、大に蔓りて、善き植物を害し、終にこをを、枯らし盡すに、至るべし

人の心へ、もと、善きものあるをども、善き教を、聞きて、これに從はざれば、善き人と、成り難し、教師の教へ、即、我心に、種子を蒔くに同じ、故に、心を用ゐて、これを育ひ、能く成長せしむべし、然るども、不正の心の、生ず易きこと、雜草の如くあるべ、心に蒔きたる、善き種子を、害をべきものも、勉めて、こをを拔き去らばへ、わるべうらに、もしこをを拔

き去ることを、怠りて、成長せしむるときは、終は
は、中は萌せる、良心を害して、こを枯らし盡に
は、至るべし
汝等、善き人と、あらんことを欲せば、此人の、雜草
を拔き去るが如く、勉めて、不正の心を、拔き去る
べし」
爰は、圓き器と、四角ある器とは、入
れたる水にかりゝと水は、同じけれ
ども、其器の形は、由りて、或圓く、或
四角ある、形とあるより





人も小兒の時は、此水の如く、善き友は交りて、善
きことを、見聞けば、善き人となり、又、惡しき友は、
交りて、惡しきことのみを、見聞けば、惡しき人と
なるなり」
家の内外は、數多の小兒にて、其遊ぶさまの、各異なるを
見るべし、家の内なる小兒は、
日々學校にて、學びたる所を、
家に歸りて、其友と互に問答
して、こを樂とし、此等は、他

日、必賢き人と、あるべし、又、外ゑ集まり、遊べる小兒ハ、學校ゑも、行うざる者と見えて、犬を嚙ミ合せ、棒を打揮り、無益の遊のミをあせり、此等ハ、後日、必愚あるものと、あるべし、汝等、賢き人とあらんと思ふゞ、能く心を用ゐて、常ゑ、善き友と交り、必惡しき小兒等と、遊ぶべうらゞ、

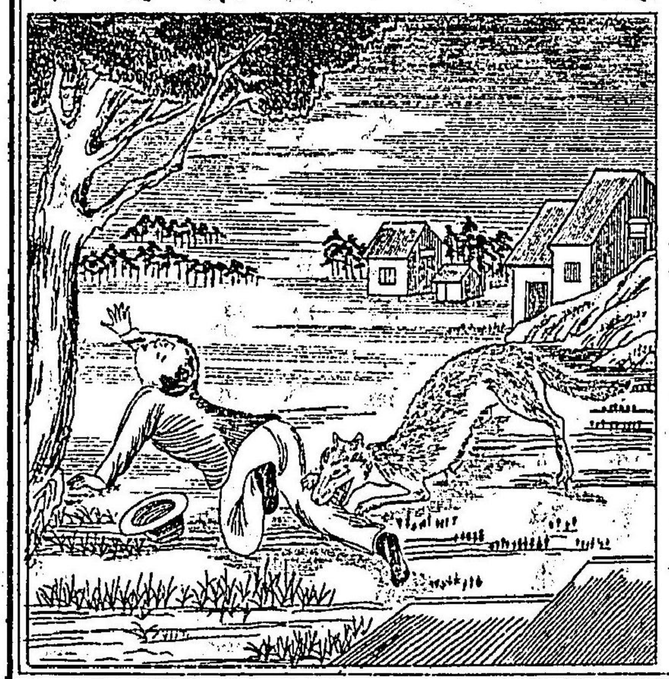
汝等、事の正しうらざるを、知るときハ、たとひ他日、利ありることゝ、思ふとも、決して行ふべうらゞ、又、惡しき業をゞ、假にも、心ゑ、行ものんことを、思ふべうらゞ、若、心ゑ行ものんことを、思ふときハ、縱令

事にハ、出さゞとも、既ゑ行ひたるゑ、同じと知るべし

凡て惡事ハ、虛言より、始まるものあり、さきハ、暫、其身に、利益ありとも、決して、虛言にべうらゞ虛言を以て、得たる利益ハ、他人の物を、盜みたると、同じく、終ゑハ、其身の害とあるべし

むかし、一人の男兒ありて、毎ゑ、狼來きり、狼來きり、誰ゝ出てゝ、救ひ給へと、大ゑ呼びて、途を走きり、こきハ、真ゑ、狼の來きるゑハうらゞ、他人の、出來りて、救ものんとそるときゑ、欺き得たりとて、大

ま、其人を笑ふを以て、戯とそるふり、斯くそること、度々ありしが、ある日、真ま、狼来りて、此男兎を、食たんとに、男兎へ、大ま呼びて、狼来きり、救ひ給へと、いつべども、誰も、亦例の虚言ふるべしとて、こまを、救ふもふのふうりしゆゑ、終ま、狼のためま噬み殺されたり、故ま、平生、戯ま、も虚言



を以て、人を欺くものハ、適、真實のことを、話せども、信とふにもの、ならざれハ、常ま、慎むべきことならばや」

此處を、何如ある家ありと、思ふぞ○こまべ、書肆なり、爰ま、三人の男なり、帽を戴きたる、二人の者ハ、書籍を、買もんがためま、此處ま、来まるなり、一人ハ既ま、一冊の書を、購ひ得て、去らんと

次に一人も、机上の、書の、價を定め居るあり、今、此二人の、書籍を買ふへ、何の為ふりや、家ヨ歸りて、こまを理會し已の智識を、増さんとにれば、あり、書ふけまべ、智識を増そこと能をば智識無きときべ、國の利益を、興べこと能もに、故ヨ、志ゆる者へ、有用の書をべ、金を惜まべして、こまを購ふふり」

此圖の男へ、手ヨ持てる、書を讀こて、其義を、小兒ヨ、語り聞うしむる、所ふり○汝、この小兒へ、能く心を用ゐて、其話を、聞くと思ふう○此小兒へ、心

を用ゐて、其話を聞くと、見えて、此男の、語ることを、深く考ふるさまふり、思ふヨ、今聞く所へ、此書の中の、尤大切ある、箇條ふるべし○凡て、教を人ヨ受る者へ、決して、倦怠の心を、生ぜるとき、直ヨ、其顔色ヨ見へるゆゑに、教ふる者も、亦こまを知りて、懇ヨ、教訓にることあし、されば、教を受る者へ、皆此小兒の如く、心を用

あて、其話を、能く考ふべきことなり」

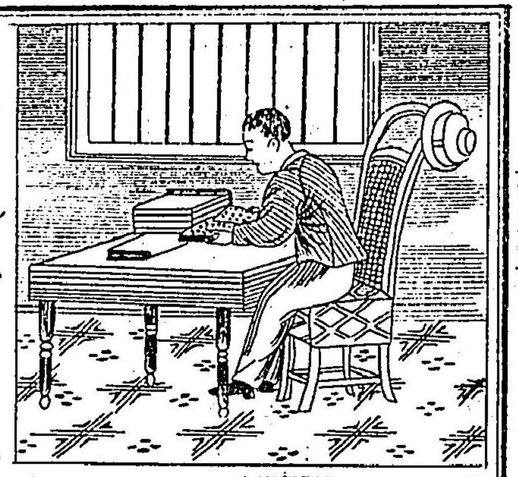
第六

汝へ、猫の兒を、愛にるゝ、又、犬の兒を、愛するか。我へ、猫まても、犬まても、其遊び戯るゝ所を、見ることを好めり

總て、獸類も、稚き時へ、小兒の如く、遊び戯るゝことを、好むものゆゑ、中にも、猫の兒へ、繩又へ鞠を弄びて、能く戯れ遊ぶなり。然れども、

獸類も、年老ゆれば、遊び戯ることを、好まず、人まて、年長けたる後まで、遊び戯るゝへ、耻づべきことまちらばや。されば、老たる猫も、其兒の、戯れ遊ぶを、見ることを、好めども、其身に、觸るゝことをべ、喜べざるゆゑ、老人も、小兒の遊ぶを、見ることを、好めども、其身に、觸るゝことをべ、喜べざるものゆゑ、小兒へ遊び戯るゝとも、老人の身まで、觸れ、又へ、其椅子、机ゆゑ、決して、手を着べうらば」

此小兒へ、學校まて、善き生徒なり。汝へ、此小兒



の、學校ゑて、書を讀むを、聞きたりや○此頃始めて、こを聞きたり

此小兒ハ、何の書を、讀めるや○彼ハ、小學讀本を、讀めり○其讀む所の、小學讀本ハ、何の卷ありや○彼ハ、卷の三を讀めり、我ハ、この小兒の如く、能く書を讀むものを、好む、能く書を讀むものハ、後ゑハ、善き人と、ふを、べあり、○若學問もふく、智慧もおくべ、いかでう、善き人と、ふることを、得べ

き、善き人と、ふることを得ざれば、他人ゑ、愛せらるゝことも、おく、又、貴ばるゝことも、おく」

爰ゑ、三人の小兒ありり、一人ハ、机ゑ向ひて、書を讀み、二人ハ、獨樂を廻ハして、遊べり、獨樂を廻ハして、跳り旋るゆゑゑ、机ゑ觸れて、其上の、筆筒を倒せり、書を讀く居たる、小兒の心ゑハ、此二人の、戯を遊ぶを、何如ゑ騒

ずして、思ひ居るふらん、定めて、此小兒等の、他處
へ、行うんことを、願ふふるべし
總て、人へ、自好まざることをべ、人も、亦好まざる
ものと、思ひ、遊び戯るるにも、決して、人の妨と、お
るべきことを、ふにべうらば、又、自好むことへ、人
も、亦好むものと、知りて、これをまづ、人へ讓るべ
し、きまべ、古き教へまも、已の、欲せざる所ハ、人へ、
施にことおうれといひ、又、已、達せんと欲せべ、人
を、達せしめよ、とも云へり」
爰へ、遊歩に出でんとにる、小兒ら○汝ハ、此小

呼び返されて、こまを、厭ふ心の、色を見ハるも、
必善きものをならば、知るべし
此小兒へ、未學校へ入らざるか○此小兒ハ、五六
兒の、善きと、惡しきとを、知
りや○我ハ、本、其人とお
りを、知らばと雖今遊歩へ
出でんとするに、其母へ、呼
び返されて、速へ歸り来り、
否も色ふきを、見まべ、善き
ものふるべし、もし、其母へ、

歳は、過きぬと、見ゆきべ、未ダ學校まへ、入らざるべし、我へ、此小兒の、學校まへ、入りても、遊歩のミを、好まぶして、勉めて、書を讀み、成長の後も、其善き人たるを、失へざらんことを、願ふあり、

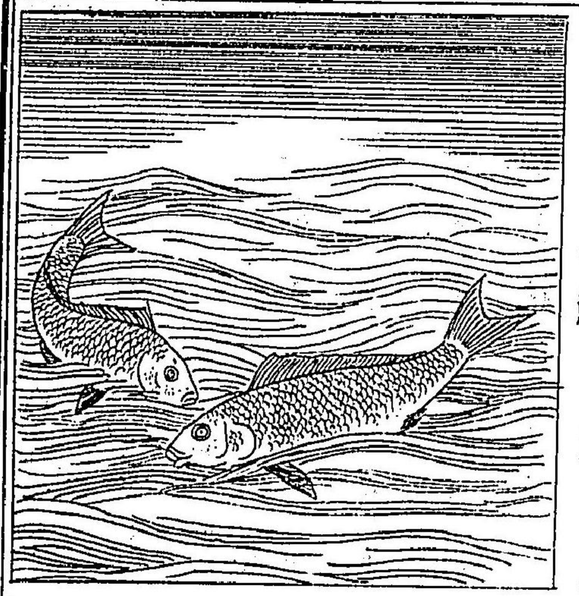
此圖は、画けるへ、何物ぞや○こゝ、魚なり

汝へ、生きたる魚を、見たるべし○常は、これを見る

汝へ、漁せしことゝなるべし、何を以て漁せしや○鈎と、糸とを以て、魚を鈎しことゝなり

魚へ、水中は住むものゆゑは、水を離るゝときへ、

其命を保つこと能もぶ○魚まへ、鰭と、尾ゝりて、自由は、水中を游泳し、又全身は、鱗ゝるあり、鱗ゝきゝり、其鱗も、魚はよりて、大小を異はぜり



汝へ、魚の、水中はゝるとき、も、其目へ、よく物を見ると、思ふ○然り、水中はても、よく物を見るなり○何を以て、水中はても、能く物を見ることを、知きるや○も、水中はて、物を見ること、

能べざる時へ、必岩石又、衝き當りて、頭を傷くべし、然らざるものも、よく物を見ることを、得きばなり

人ハ、水中ゐて、物を見ることハ、分明ならば、魚ハ、水中ゐても、甚分明なり、

そは、魚の水中ゐて、能く物を見るハ、其目、人と同じうらざれハなり

魚ハ、水中ゐ住ゑ、人ハ、空氣中に、住むゆゑ、人の、空氣中ゐて、能く物を見るハ、魚の、水中ゐて、能く物を見ゐ同じ」

今、この男兒ハ、家を辭して、遠行せんとし、戸前の、階を降りたるゆゑ、其妹も、階を降りて、これを送り、別ゐ臨ゑて、互ゐ、言を贈答もる所なり

兄曰、汝、慎ゑて、家を守り、能く、其身を保つべし、火を過つことなかれ、病を生もることとなるまと

○妹ハ、吾ガ兄、寒暑を犯もべうらば、又、久しく、他鄉に、止まるべうらばと云ふ

兄、又云ふ、予、彼郷に到らば、速に、書を以て、安否を報ぜべし、汝も、亦其安否を報ぜよ、予が、他郷に在る間は、只汝の消息を、得るを以て、樂とふにべきのみ

汝等、此二人を何如ふるものと思ふや。これも、同胞の孤あり、孤とは、幼稚のときに、両親を、喪ひたるものをいふ、

此二人、早く、両親を、喪ひたるゆゑに、今自身を立てんとにるあり、

今、この男子は、遠方へ行きて、幾年、妹と相見ることを得ばとも、文字を知まるゆゑに、互に、書簡を贈答して、其安否を、審にすることを得べし

もし此二人、文字を知らば、何に因りてか、音信を通ずることを得べきや

汝等、此二人の、事を見て、能く文字を、習ひ、勉めて、書簡を作ることを、學ぶべきなり」

むかし、ある家に、兄弟の小兒あり、兄は、七歳にして、弟は、五歳なり。兄は、其才、最敏にして心も、亦優しきものなり、弟は、良を性質ふまれども尚幼きゆゑに、未だ世間の事を知らざれば、輙もそれを、過りたる、

擧動をあにことなり

なる日、兄弟ともに、郊外に出でゝ、遊べるに、ある家の、籬に、小鳥の巣なり、親鳥に、人の来るに、驚きて、飛び去りたり、兄弟は、巣の中を、窺ひ見るに、雛三羽なり、弟に、悦びて、雛を取りて、持ち帰らんといふを、兄に、これを止めて、親鳥の、子を愛にるも、父母の、我等を、愛し給ふに、同じ、今故、この雛を、取り去らば、

親鳥の悲、何如あらん、若し、我家に入り来りて我等兄弟を、捕へ去るものならば、父母の悲に給ふと、幾ばくあらん、ましてや、雛も、親鳥の、養に由りて、生長にるものにして、今、人の手にかゝりあば、決して、育つことなるべうらば、されば、今、この雛を、取らざることそよけまと、諭しけまば、弟も、其理に服して、兄の教に、隨ひたり

此弟の、鳥の雛を、取らんとにるに、殺生をるにも、非まども、其理を論ぜれば、かくの如し、まして、無益に、殺生をるをや、

きれば、縱、小き蟲たりとも、無益なる、殺はべうらば、世の理を、知らざる者へ、小き蟲を、殺はを以て、些細の事とせり、實は、些細の事は、似たりと雖、こを殺さんと、思ふ心も、即、些細の事にあらば、その心、既に慈悲を失ひたるあり、慈悲を失ひたる心、漸長するに至らば、啻に、畜類を、殺はのみならば、終には、人を殺はの、大惡なるも、陷るべし、豈恐るべけんや、

故に、殺生を、誡むるは、慈善の人となるべき、階なりて、終には、類まれなる、善人となり、身の幸福

を、得るに至るべし

小學讀本卷之二 終

此等集　齒　棒　打揮　無益　後日　業
縱令　惡事　虛言　始　狼　救　給　出來
欺　笑　戲　噬　平生　適　真實　慎　何如
書肆　戴　購　價　理會　智識　興　有用
箇條　受　倦怠　顏色　懇　教訓

第六

犬　獸類　繩　鞠　弄　老人　椅子　生徒
獨樂　跳　筆筒　讓　速　雖　自由　全身
雛　岩石　分明　遠行　戶前　階　妹
臨　贈答　兄　寒暑　到　安否　消息　同胞
孤　文字　書簡　音信　敏　優　性質　擧
動　郊外　離　悲　投生　蟲　些細　慈悲
漸長　啻　畜類　大惡　誠　慈善　幸福

小學讀本翻刻御届
明治九年十二月十五日
小學讀本釋文御届
明治十年三月八日

小學讀本釋文　全

編輯人　橋爪貫一
第四大區三小區
小石川大門町三十六番地

兩點千字文

資父事君 曰嚴與敬 孝當竭力 忠則盡命 臨深履薄 夙興溫凊
似蘭斯馨 如松之盛 川流不息 淵澄取映 容止若思 言辭安定
篤初誠美 慎終宜令 榮業所基 籍甚無竟 學優登仕 攝職從政
存以甘棠 去而益詠 樂殊貴賤 禮別尊卑 上和下睦 夫唱婦隨
外受傅訓 入奉母儀 諸姑伯叔 猶子比兒 孔懷兄弟 同氣連枝
交友投分 切磨箴規 仁慈隱惻 造次弗離 節義廉退 顛沛匪虧
性靜情逸 心動神疲 守眞志滿 逐物意移 堅持雅操 好爵自縻
都邑華夏 東西二京 背邙面洛 浮渭據涇 宮殿盤鬱 樓觀飛驚
圖寫禽獸 畫綵仙靈 丙舍傍啓 甲帳對楹 肆筵設席 鼓瑟吹笙
升階納陛 弁轉疑星 右通廣內 左達承明 既集墳典 亦聚群英